

最終章

此処ニ或ル幸セ

【チャーリー／明治エンド】

「チャーリーさんと一緒にいたい」

現代に帰るか明治に残るか。その答えを出す前に、まず今の私の気持ちを伝えた。

「私はチャーリーさんと一緒にいたい。チャーリーさんと同じ時代で生きていきたいんだけど……それはできるのかな」

「……………」

赤い月を背にした彼は、静かに私を見つめている。

「どうしたら一緒にいられる？ 教えてよ、チャーリーさん」

つい1カ月前までは、まさかこんな気持ちになるとは思わなかった。

ただただ無責任で身勝手な人だと思っていたあの頃は、1日も早く現代に帰りたくてしかたなかった。

自分が魂依であることからもうできる限り目をそらし、あたりさわりなく過ごして今日という日を迎えるはずだった。

(……なのに、なんでこんなことに)

よくわからない。

でも私以上によくわからないと思っているのはチャーリーさん本人なのかもしれない。

「芽衣ちゃん。僕は、人間ではないよ」

あらためて確認するように彼は言い、手を伸ばしてそっと私の頬に触れる。

「僕は人間とは違う。こうやって、実際に触れることはできるけど……それも今だけだ」
(うん。わかってるよ、チャーリーさん)

この夜がいずれ終わって、朝日が昇れば消えてしまう手とぬくもり。
一緒にいられるのは1日の半分だけ。

それが普通であると言いがたいことは、私もわかっているつもりだ。

「僕はね、君を人間と同じように幸せにすることはできないと思うんだ。いくら人間に近づけても、人間そのものになれるわけではないから」

チャーリーさんの声音は、あくまでも穏やかで平坦だ。

「それが君にとって一番いいことかどうか、よく考えてみてほしい。どんな答えでも僕は受け入れるよ。君自身が決めたことを大切にしたいからね」

「……考えたよ、ちゃんと」

「本当に？」

すぐに切り返された。

「本当に、僕でいいの？」

とたんにその声が、探るような色を漂わせる。

いつもの笑顔はなりを潜め、瞳がかすかに揺れた。

(どうしてそんなに不安そうな顔するの?)

私は迂闊で、浅はかかもしれないけど、そこまで考えなしじゃない。^{うかつ}

その場の勢いで気持ちを伝えたわけでもないし流されているわけでもなかった。

……でも、迷いや心配事はゼロじゃない。それを隠しきれている自信もなくて。

「……………」

(……そっか。やっぱり私がそんな顔させてるんだ)

きつと今、私たちは似たような表情をつき合わせているに違いない。

お互い行き着こうとしている場所が、最初の予定とあまりに違いすぎて。

「僕と一緒にいたら、現代には帰れないかもしれないよ」

「……明治で暮らすって決めたの?」

「うん。とりあえずはね」

チャーリーさんは軽く肩をすくめて答える。

「いつかは気が変わって現代に戻ろうとするかもしれないけど、その時にマジックが成功する保証はないんだ。現代から長く離れば離れるほど戻れる確率は低くなる」

「そうなんだ……」

「うん。時間が経つにつれて、帰り道が見極めづらくなるっていうのかな。目印がわかりにくくなるんだ」

かなり漠然としたたとえだ。

なにせよ確実に現代に帰りたいたいなら、やはり今日を逃すべきではないということらしい。

「僕はとりたてて現代に思い入れがあるわけじゃないけど、君は違うだろう？こんないかがわしい物の怪と本気で明治に残る気？」

「……………」

チャーリーさんを選ぶか、現代での生活を選ぶか。

突きつけられた選択肢はその2つだ。

『チャーリーさんと2人で現代に帰る』

なんていう都合のいい選択肢は、ここには用意されていない。

——それなら、私の選ぶ道は1つだ。

「チャーリーさんと一緒にいたい」

もう1度、はっきりと告げた。

「私、そばにいてもいい？」

「芽衣ちゃん……」

「チャーリーさんと一緒に生きていきたい。そばに置いてほしいの。夜だけでいいから」
もしいつか、すべてを思い出して、現代に帰れないことを後悔する日が来ても。

今、この気持ちをないがしろにすることはできない。

チャーリーさんと一緒にいたいと思う気持ちを無視して、未来の自分に保険をかけることなんてできなかった。

「チャーリーさん……？」

私の頬に触れていた手が、やがて髪を梳き、肩に下りて。

存在をたしかめるかのように、ゆっくりと抱きしめられる。

どこか遠慮がちな手。奇術師らしからぬ、たどたどしい手つきだ。

「ごめんね」

耳もとで小さな声でした。

どうして、謝るんだろう。

「私じゃだめ？ 一緒にはいられない？」

「そうじゃない。嬉しいんだ、すぐくね」

吐息とともにこぼれる声が鼓膜に響く。

「……君とこうして話したり、触れたりできるだけでも十分幸せだったのにさ。まさか君が、僕を選んでくれるなんて……信じられなくて」

ひどくおおげさなことをチャーリーさんは言う。

「君にはもつと、幸せになれる道があったかもしれない。……でも、それをすべて僕が

奪ってしまった」

「そんなこと……」

「奪ったんだ。僕の都合のいい夢のためにね」

彼は言いきり、静かに私を抱きしめる。

まるで懺悔でもするみたいなの、ひそやかな囁きだった。

「でも、あと少しだけ……この夢を続けられたらと思うよ。君がいつか、別の幸せに気づいても……」

(そんなふうに言わないで)

「僕は君を守る。誰とどこにいても……君がこの時代にくれる限りは」

別の幸せになんか、気づかなくてもいい。

チャーリーさんと離れてしまおうくらいなら。

それが目覚めを意味するなら、ずっとこのままでもいい。このままずっと夢の中でまどろんでいたい。

「チャーリーさん……」

私は彼の胸に、ぎゅっとしがみついた。

懐かしい匂い。

薄暗くて暖かい。

部屋の中で、ひっそりと守られているような感覚。

(私はここにいるよ)

あの赤い満月が色味を失い、やがて歪に欠けても。

時が巡って、同じ月が再び空を昇っても、私はここにいる。

ここにいるよ、ずっと――。

*

(きれいな月……)

――よく晴れたその日、空を見上げれば、銀色の月が浮かんでいた。

薄い硝子の欠片みたいな、華奢な月。

触れれば割れてしまいそうな細い三日月だ。

やがて日が傾くと、月はますますその身を鋭利に輝かせる。

秘めやかな月明かりの下、どこからともなく聞こえてきた祭り囃子に誘われて、私は

公園にやって来た。

じんちゆうこう

「さあお立ち会いお立ち会い！手前ここに取り出したる陣中膏はこれ、ガマの油。ガマと言っても、そんじよそらのガマとは物が違う！」

「ハイご通行中の皆様、容貌奇妙にして珍妙なるこの娘、親の因果が子に報い、生まれ出たるはへび女！お代はあとでけっこうだよ、ハイ入って入って〜」

大道芸人たちの前口上や呼び込みの声が響くなか、やがて私の目の前に1人の奇術師が現れた。

「やあ、芽衣ちゃん。元気だった？」

なんの前触れもなく、薄闇の中からぼんやりと浮き上がるように。

チャーリーさんと会う時はいつもこうだ。

明治時代に残ると決めてから、はや2週間。

奇術師修業と称した逢瀬は、毎夜のように続いている。

「いやあ、すごい人出だねえ。祭り囃子を聞くと、マジシャンの血が騒いでしかたないよ」

生粋のエンターテイナーである彼は、なにかマジックを仕掛けたくてウズウズしているようだった。

「……また警察が集まってきても困っちゃうんだけど」

「お祭りの時は例外だよ。今夜はみんなに楽しむ権利がある。人間だろうが警察だろうが物の怪だろうが、例外なく」

(ぜんぜん懲りてない……)

鹿鳴館で警察相手に派手にやらかし、常にマークされるような状況の今でも、彼は懲りずに奇術ショーを開いている。

しょうぎよくさいてんいち

松旭齋天一の名は広く知られるところとなり、それまで奇術を軽んじていた劇場側がいよいよ上演許可を出したらしい。

物の怪らしからぬオープンな行動の数々と、社交界からの注目度の高さもあって、妖邏課も彼のことを持てあましているようだった。

「私には、よくわからないんだけど……。どうしてわざわざ注目を集めるようなことしちゃうわけ？ リスクが高すぎると思わないの？」

詳しいことはわからないけど、妖邏課は過去にたくさん物の怪を封印してきた例があるらしい。

妖邏課の判断次第では、チャーリーさんがその一例になる可能性だって当然あるわけだ。

「だってさみしいじゃないか。今はまだ物の怪の存在がギリギリ認知されている時代なのにさ。僕らが身を隠したら、ますます『視る』人がいなくなってしまう」

「……それって、魂依のこと？」

「そう。僕はこのまま、物の怪も魂依も共存できる世の中が続いてほしいんだ。1日も長くね」

「ふうん……？」

なんだか壮大な計画だ。

彼はただのお祭り好きというだけではなかったようだ。

(でも、いずれは物の怪も魂依もいなくなっちゃうんだよね……)

きつとあと100年もすれば、物の怪は人前に姿を見せず、物語の中にしか登場しない存在となるはずだ。

チャーリーさんもそれをわかった上で、1日も長く物の怪の存在が認められた世の中を続けようとしている。

そう思うと、なんだか無性に切なくなつた。

いつかチャーリーさんが、私の目の前から完全に姿を消してしまうような気がして。

「ん？ なに？」

思わずチャーリーさんの腕を掴む。

こうして実体はあるのに、消える時は一瞬だ。その理不尽さをいまさら呪ってみたところでもうにもならないけど。

「……まだこの時代に、フランクフルトの夜店はないんじゃないかなあ」

「誰もそんな話をしてないでしょ」

さつきから小腹が空いていることをすっかり見透かされている。

私が深くため息をつくとき、彼はくすくすと笑った。

「この時代に残ったこと、後悔してる？」

「フランクフルトぐらいじゃ後悔しません」

「はは、やせ我慢しちゃって」

今の言い方はむかつとした。唇を尖らせる私に、チャーリーさんが素早くキスをする。

「……………」

あまりに素早すぎて、目をぱちぱちとさせる私。

すると今度は、ゆっくりと唇が重なった。

「……………」

「……………、ちょっ……………」

「どうしたの？」

「ひ、人目があるんだけど……………」

うろた
狼狽えながら訴えても、チャーリーさんは何食わぬ顔で小さく口づけをくり返す。

「別にかまわないよ？ 僕の姿はみんなから見えてないし」

「なっ……………！」

(なんて卑怯なっ)

思わずその片眼鏡を引ったくって林の中に放り投げてやろうかと思ったその時、

「ははっ、さすがにそれは不公平か。じゃあここは1つ……。どう？ これなら公平だろう？」

チャーリーさんは一瞬で、例の袴姿へと変化した。

「これでもう文句はないはずだ。というわけで、キスしてもいいよね？」

「えっ……。っ……！」

なにを思ったのか、チャーリーさんはさらに堂々とキスしてきた。

ぎゅつと抱き寄せられ、強くふさがれた唇。心臓が激しく脈打ち、一気に力が入らなくなった。

「んっ……。ま、待って……。ねえっ」

「待てないんだ、それが」

「っ……。く……。っ」

吐息が舌に触れ、熱くとろけそうになる。息もできないくらい強引に唇を押しつけられ、全身が汗ばんでいく。

（いやいや、これは恥ずかしすぎる……。っ）

ここが現代の渋谷や六本木なら、道端でキスしているカップルもいるかもしれないけれども。

（ここは明治時代なんだってばっ）

いくら薄暗い場所にいるからと言って、まったくの安全圏ではない。通行人はすぐそこにいる。

「かわいいよねえ、芽衣ちゃんは」

「っ！」

「いいの？ 僕なんかになんかかわいい顔見せちゃって。なんだか恐縮してしまうよ」
そう言いつつもキスが止まる気配はない。

じりじりと後ずさりをしていたら、背中の大きな木まで追いつめられた。

「はあ、どうして逃げるのかな。久しぶりに会えて嬉しいのは僕だけ？」

「久しぶりでもなんでもないでしょっ。半日前に会ったばかりじゃない」

「半日も前じゃないか。……そんなの長すぎるよ。僕にとっては」

「……っ」

やわらかな唇が、再び私の唇に乗る。

触れ合う舌がどうしようもなく熱くて、抵抗する力がみるみると失われていく。

「半日前より、もっと好きだよ。芽衣ちゃん」

耳もとに唇が移り、熱い息とともに囁かれた。

「今が昼間なら、君のかわいい顔がもっとよく見えるんだろうなあ」

「……………」

なんだか切なくなつてまつげを伏せると、おでこにそつとキスを落とされる。

「そんなに悲しそうな顔しないでよ」

「だって……」

「本当は、君を1日中ひとりじめできたらいいて思うけどさ。……でもいいんだ。君にこうして触れて、君に好きだって何度も伝えるのが、僕の夢だったから」

まぶたに、鼻先に、頬に、たくさんのキスの雨。

「こんなに素敵な夢が夜明けまで続くなんて、僕は本当に幸せだよ……」

チャーリーさんは嬉しそうに笑った。

そんな顔を見ていたら、私まで嬉しくなった。私でも誰かを幸せにできるんだと思つたら、自分のことが少しだけ誇らしくなった。

（私も幸せだよ。チャーリーさん）

タネも仕掛けもない奇術みたいな、都合のいい夢。

でも夢は夜に見るものだと決まっているから、夜明けになれば醒めてしまう。

——それでも。

（私はここにいますよ）

明治という夢の中にいつのまにかまぎれ込んで、今もなお夢の途中にいる。

私は今も、ここにいます。

「これよりご覧に入れますのは、波瀾万丈、摩訶不思議の冒険活劇！題して、『松旭齋天
一・天勝てんかつの華麗なる生涯』！時は平成〇〇年、とある祭りに迷い込んだ娘は天才奇術師チ
ャーリーこと松旭齋天一の奇術によって明治時代へとタイムスリップ！」

「『私を現代に帰して、チャーリーさんっ』」

「『もちろんだよお嬢さん。ただし今すぐには帰せない。チャンスは次の満月の夜だ
……！』かくして森鷗外邸に滞在することになった、この娘。慣れない明治の生活にとま
どいながらも親切な人々の恩を受け、牛鍋に舌鼓を打ち、松旭齋天一の奇術ショーを楽
しむかたわらで、いつしか自分も奇術師になりたいと思いはじめる！」

「『私、チャーリーさんみたいな世界一の大奇術師になりたい！ お願いです、私を弟子
にしてください！』」

「『はは、馬鹿を言っちゃいけない。君は現代に帰るんだろう？』」

「『だったら僕みたいなイケメン天才奇術師のことは忘れて、ほかの誰かと幸せに……』」

「『嫌！ チャーリーさんじゃなきゃ嫌なの！ 私を弟子にしてくれなきゃ、魂依パワー
で滅ぼしちゃうから！ ぶんぶん！』」

「縁は奇なもの味なもの、こうしてみごと弟子の座を掴んだ娘。その日から松旭齋天勝
と名乗り、愛する師匠とともに天才美人奇術師として末永く幸せに暮らしましたとさ」

「ああ、めでたしめでた……あだっ！」

「な、なにをするのかなっ、芽衣ちゃん。いきなり靴なんか投げてきて！」

「勝手に話を脚色しないで！」

それまで黙ってチャーリーさんの前口上を聞いていた私。

でもいよいよ我慢できなくなり、ついつい手が出してしまった。

「いやいや、どこが脚色だっていうのさ。まあ多少は省略した部分もあるけど、時間の都合があるからしかたないんだ」

チャーリーさんは悪びれた様子もなく、しれっと言っただけ。

「メインはあくまでも奇術ショーなんだから、前口上で時間を取るわけにはいかないだろう？」

「それはそうだけど……」

でも、なんだか納得がいかない。

……そうこうしているうちに、開演時間は迫っている。

——そう。

今日は松旭齋天一と天勝による、奇術ショーが行われるのだった。

明治時代に残ることを決めた私は、結局チャーリーさんの弟子となり、数々のマジックを身につけた。

まだまだチャーリーさんにはかなわないけど、修業の成果は着実に現れてきているところだ。

「……ところで」

「？」

「……今日という今日は言わせてもらおうけど、そうやってすぐに靴を投げるのはやめてもらえないかな」

「え……」

「まったく……いつになったらわかってもらえるんだろう」

さすがの師匠も、私の言動にはいい加減痺れを切らしたのかもしれない。

そう思っって顔を上げると、私の目の前には、恍惚とした笑みを浮かべたチャーリーさんがいた。

「ふふ、ふふふっ……」

「君だって本当は気づいてるんじゃないのかな……僕は靴を投げられるよりも、靴で踏まれるほうが好きってことを……」

(こ、これはもしや……)

「そんなことより早く練習しないと！」

「ああ、そうだった」

一瞬にして我に返ったチャーリーさんは、私に帽子を差し出した。

「じゃあさっきのマジック、念のためもう1度やってみて」

「はいっ」

私は帽子を片手に持ち深呼吸をして精神を整える。

帽子のなかから出すのは猫だ。雑念を捨て、かわいい猫のことだけを頭のなかに思い浮かべる。

「3、2、1……えいっ！」

「!!」

「!？」

「ああっ！ 駄目だよ！ それは猫じゃなくて妖怪猫又じゃないかっ！」

「え、嘘……」

私の帽子から出てきたのは、猫……と思いきや、よく見ると尻尾が割れている。

私が出したいのは物の怪ではなく、普通の猫なのに。

「こんなところに物の怪なんか呼んでどうするの。お客さんには見えないんだよ？」

「あれ、お、おかしいな。こんなはずじゃあ……」

とは言いつつ、失敗するのは今日で5回目だ。

もうさすがに自分の才能に限界を感じてしまう。

「あれ？ なに落ち込んでるの？」

「だって……」

「大丈夫だよ。君には十分に奇術師の才能がある。嘘じゃないさ。猫を出そうとして物の怪を出しちゃうなんて、凡人にはなかなかできない芸当だ」

「……」

黙り込んだ私の頬に手をそえて、チャーリーさんは顔を覗き込んできた。

「……ふふ、そんな顔しないでよ」

「だって……」

「さては、現代に帰りたくなつた？こんなはずじゃなかったのに……つてさ。もし君が、どうしても現代に帰りたいていうなら、なんとかしてあげられなくもないけど……」

「え……？」

驚きとともに、私は顔を上げた。

今からでも現代に帰れるかもしれない、という事実には驚いたんじゃない。

いつまでも半人前な私に、チャーリーさんが見切りをつけたのではないかと思つたからだ。

「……っ」

私は我慢できなくなつて、チャーリーさんの胸にしがみついた。

彼は一瞬驚いたようだけど、すぐに私の身体に腕を回しそっと抱きしめ返してくれる。

「どうしたの？」

「チャーリーさん……私のことが、邪魔になった？」

「ええ？」

きよとんとした顔をしたあと、困ったように笑う。

「君のことが邪魔になるなんて。そんなこと、あるわけないじゃないか」

その言葉を聞いて、私は顔を上げる。

私は彼がそう言ってくれるのをわかっていて、あえて言葉を求めている。

「……本当に？」

「本当だよ。君がこうして、僕の腕の中にいてくれるなんて……」

そう言いながら、私を抱きしめる腕に少しだけ力をこめた。

「本当に、嬉しいんだ。もしこれが夢なら、僕は一生この夢から目覚めなくていい。そう

思うくらい」

「……」

「でも……もしかしたら君には、もっと幸せな結末があったのかもしれない」

そうつぶやいて、チャーリーさんはほんの少しだけさみしそうに笑った。

「……なんてね、いま一瞬だけ、そう思ったんだ。別に根拠があるわけじゃないけどね」

「そんなこと、言わないで……」

ほかの結末なんて、考えてほしくない。

これが夢だというのなら、私はチャーリーさんと同じ夢をいつまでも見ていたかった。
「ああごめん、なんでもないよ。ただのひとりごとだ」

私の顔を覗き込み、視線を合わせると安心させるように微笑んだ。

「それより、いつまでこうしているつもり？」

「そんなに甘えられると、師匠としては困るんだけどなあ。ちっとも練習に身が入らない。……もっと強く抱きしめて、もっと君を、甘やかしたくなるじゃないか」

(そうしてほしい)

あと10分。いや、あと5分だけでいい。

少しの間抱きしめてくれたら、私はすぐにでも不安から解き放たれる。

「まったく……僕が君に逆らえないのを知ってて、わざとそうしてる？」

「そ……そういうつもりじゃ」

「はは……あいかかわらずひどいよねえ。いいよ、君がどれだけ意地悪でもかまわない。その代わり……。たまには僕も……反撃するから」

「……っ」

軽く触れた唇。

それからすぐに、口づけが深くなる。

恥ずかしくなつてうつむこうとすると、くいと指で顎を持ち上げられた。

「駄目だよ、まだ僕の反撃は終わってない。ほら……ちゃんと口を開けてくれなきゃ」

「……っ……」

滑り込む舌と舌が触れ合う。その熱い感触に思考が乱れる。

「……好きだよ。君のことが誰よりも……ずっとずっと、好きだった」

耳や頬、額、顔中のあちこちに落ちてくる優しい口づけ。

不安も、孤独も、さみしさも、そのキスですべてが曖昧になっていく。

未練も心残りも罪悪感も、なにかも甘く溶けて――

「もしこの時間が、僕にとって都合のいい夢なら……それでもいい。もう少しだけ続けさせて。やっと君を、手に入れたから……」

） F I N （